

令和 4 年 4 月 26 日現在

機関番号：14301

研究種目：若手研究

研究期間：2020～2021

課題番号：20K13177

研究課題名（和文）18世紀初頭における幕薩琉関係の展開に関する研究

研究課題名（英文）The relationship between the Edo Shogunate, the Satsuma Domain, and the Ryukyu Kingdom in the early 18th century

研究代表者

木土 博成 (kido, hironari)

京都大学・文学研究科・助教

研究者番号：10737456

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 800,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、18世紀初頭の江戸幕府 - 薩摩藩 - 琉球王府の三者の関係について、琉球使節の江戸上り、書翰の文言変化、銀の吹き替え、といった各テーマについてそれぞれ詳述した。その結果、薩摩藩が琉球支配の困難さを、誇張して幕府に強調することで、様々な特別待遇を受けるあり方が確立したという意味において、18世紀初頭が三者関係の画期であると結論づけた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

これまで、18世紀初頭の幕府 - 薩摩藩 - 琉球の三者関係については、幕府の政策が転換したことを重視し、幕府の主導性を強調する学説が有力であった。これに対し、本研究では薩摩藩のレトリックに注意し、薩摩藩が見せたかった三者関係を明瞭に打ち出した。これにより、薩摩藩の主導性をより重視した三者関係を構築するための足がかりを得ることができた。

研究成果の概要（英文）：In this study, I considered the relationship between the Edo Shogunate, the Satsuma Domain, and the Ryukyu Kingdom in the early 18th century. I concluded that the Satsuma domain exaggerated the difficulty of controlling Ryukyu and emphasized it to the shogunate, and in the sense that various special treatments were established, the beginning of the 18th century was a breakthrough in the tripartite relationship.

研究分野：日本近世史

キーワード：薩摩藩 琉球 琉球使節 新井白石 銀吹替 宝永・正徳期

## 1. 研究開始当初の背景

1609年(慶長14)の島津の琉球入り後、琉球は近世琉球と画される時期に入る。その近世琉球期には、中国皇帝から冊封を受ける、という琉球国王の地位は温存された。一方で琉球は、江戸幕府(将軍)から薩摩藩主(島津氏)に所領として与えられるという新たな性格を帯びた。

その近世琉球期を、江戸幕府・薩摩藩との関係に即して見た場合、これまで、いくつかの画期が指摘されてきた。第1には、1630~40年代の寛永期であり、当該期には琉球使節(江戸上り)が成立するとともに、薩摩藩の「附庸」(属国)でありながら「異国」でもあるという近世琉球の特異な立ち位置が確定を見た。

その後、1640~80年代の明清交代という激動期を経て、18世紀初頭の宝永・正徳期に至ると、新井白石が主導する政治改革とあいまって、幕府-薩摩藩-琉球の三者関係が新たな段階に入るとされてきた。

しかし、この18世紀初頭の画期説が提唱されてからすでに40年近くが経過しており、琉球側の「尚家文書」(那覇市歴史博物館)、それに「江戸幕府日記」といった幕府側史料の公開が進む近年の史料環境に照らせば、修正すべき点が多い。たとえば、宝永・正徳画期説においては、江戸幕府が二度も、琉球使節の派遣を無用と判断したことが前提になっている。しかし、この前提自体、史料的な再検討が必要である。

そこで本研究では、幕府、薩摩藩、琉球3者それぞれの立場に留意しながら、史料を再解釈することで、宝永・正徳期の画期の内実を問い直す。

## 2. 研究の目的

18世紀初頭(宝永・正徳期)において、琉球をめぐる生じた案件(琉球使節の江戸上り、書翰の変化、銀の吹き替え)を取り上げ、幕府・薩摩藩・琉球のそれぞれの史料を複合的に見ること、幕府-薩摩藩-琉球の三者関係の展開と転換を明らかにし、近世琉球と近世日本の関わりを考える上で、いかなる意味で当該期が画期と呼べるかを提示する。もって、三者それぞれの優位性と限界を踏まえた上での、新たな幕府-薩摩藩-琉球関係史の構築を目指す。

## 3. 研究の方法

宝永・正徳期を対象に、薩摩藩側の史料、琉球側の史料を網羅的に博捜し、関連資料を収集した上で、従来の宝永・正徳画期説を再検討する。その際、以下の3点に留意する。

第1に、江戸幕府と薩摩藩が持つ琉球情報の質差への注目。本研究では、薩摩藩と江戸幕府で持ち得た情報に質差があった、という見通しに立つ。このことを前提にした時、これまで漠然と、幕府が情報を正確に知った上で、対琉球政策を立案し、遂行していたとされてきた理解は、根本から再考を余儀なくされる。すなわち、情報格差という視座を導入することで、幕府-薩摩藩-琉球の三者関係を、平板に理解するのではなく、それぞれの優位性と限界をトータルに把握する途が開かれるのである。

第2に、薩摩藩が琉球を支配する付随的な意味合いへの注目。薩摩が琉球支配に期待したものは何であろうか?古典的な理解においては、石高制を敷いた上での貢祖の収奪、そして中国への進貢貿易に吸着することが挙げられ、確かにこれらが本来的な意味と考えられる。しかし18世紀初頭に向け、たとえば島津氏は武家官位の上昇を望む際に、琉球支配の困難性をレトリックとして持ち出して進めるなど、薩摩藩は琉球支配に付随する価値を見いだしていく。このような、新たな意義を琉球に見いだしていったのが、18世紀初頭であるとの見通しのもと、本研究では

類似事例の収集・分析に努める。それにより、当該期が、薩摩藩の琉球認識を考える上での画期であることを示す。

第3に、朝鮮と琉球の比較という視点。宝永・正徳期には、新井白石が幕政に参与し、朝鮮に対し、徳川将軍の日本国王号の復号を成し遂げた。のみならず、白石は琉球使節と伏見で会見し、琉球との書簡の改革に乗り出すなど、徳川外交史における画期となった。近世日本から見た朝鮮と琉球の相対的位置という論点は、近年、申請者が深めつつある論点であり、本研究においては、白石期を対象に当論点を深掘りする。それにより、これまで、朝鮮・琉球＝幕府と書を交わす通信国、として表層的に理解していた研究史を、次の次元に引き上げる。

#### 4．研究成果

本研究の最大の成果は、木土博成「宝永正徳期の幕薩琉関係」(『日本史研究』703号、89-117頁、2021年3月)を公にしたことにある。本論文においては、江戸幕府が宝永期に二度も、琉球使節の派遣を無用と判断したとする通説を、典拠史料の再解釈を通し、否定した。その上で、これまで江戸幕府の主導の文脈で読まれてきた史料を、薩摩藩の主導によるものと解釈し直し、18世紀初頭に、薩摩藩が琉球支配の困難性を幕府にあえて強調することで、幕府から譲歩を引き出しえたという意味において、幕府-薩摩藩-琉球の三者関係に新たな画期が訪れると結論づけた。

18世紀初頭の画期は、慶長14年(1609)の島津の琉球入り以降、「附庸」と「異国」の二原則が確定した寛永期、そして明清交替にかかわる現実的脅威があった一七世紀中葉につく画期と見なせる。ここで確立した、琉球支配の特殊性・困難性を盾に、薩摩藩が幕府に融通を求める図式は、18世紀後半以降の琉球使節に伴う幕府からの拝借金などにも引き継がれ、以後の幕府-薩摩藩-琉球関係を規定していく。

今後の課題としては、18世紀初頭の画期を踏まえ、近世期を通した日琉関係史を新たに展望することが残された。本研究では、「島津家文書」や「尚家文書」から、幕府-薩摩藩-琉球の三者関係を示す基礎史料を、18世紀初頭以外の時期においても一部収集し、リスト化したので、今後これをもとに取り組んでいく。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 木土博成	4. 巻 703
2. 論文標題 宝永正徳期の幕薩琉関係	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 日本史研究	6. 最初と最後の頁 89,117
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 1件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 木土博成
2. 発表標題 琉球使節に対する川御座船の馳走
3. 学会等名 博学連携講座「近世都市大坂像の新展開」（大阪市立大学）（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 木土博成
2. 発表標題 宝永正徳期の幕薩琉関係
3. 学会等名 日本史研究会
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------